

生涯学習時代における家庭教育のあり方

— 共生の視座より —

内 山 淳 子

〔抄 録〕

価値観が多様化する現代社会では、成人の生き方のみならず、家庭教育のあり方もさまざまである。地域間・世代間のつながりが希薄になりつつある中、人を育てるという親の役割にも学習が求められている。本稿では、子育てを終えた高齢者へのインタビュー調査、及び現在子育て中の母親への質問紙調査から家庭教育をめぐる共生について検討した。生涯学習時代において成人の学習はより他者への視点が必要であり、これは私たちの生涯を通した発達にとり重要である。そのために、他者との意思疎通の手立てが求められている。

キーワード 生涯学習、家庭教育、共生、コミュニケーション、生涯発達

はじめに

現代は価値観が多様化し、私たちのライフスタイルの選択肢は広がっている。その反面、多世代に渡る暗黙の合意の基盤としての伝承や規範は失われつつある。井上達夫はこれを「コンセンサスのない社会」とし、話し合う場がなく、また話し合いによっても合意に至り難い社会であると述べている。⁽¹⁾ 核家族が増え、地域社会との関わりは薄れており、とくに異世代の人々との意思の疎通は容易でないために、対話が疎んじられる傾向がある。そこでは、私たちは多くの情報を自由に入手する機会を得ているが、実際の生活では孤立することがある。

子育てをする母親にとって、このように個人化した環境はどのように働くだろうか。価値多様化社会では、親の生き方が多様化するばかりでなく、子どもに対して確固とした教育目的をもつことも難しい。⁽²⁾ 日常的に子育ての不安や困難さを解消する機会をもちにくい生活環境が育児不安を強めていることも考えられる。すると、子どもたちは不安定な親に翻弄される社会的弱者であるといえよう。

他方で、現代は生涯学習時代である。年齢にかかわらず身近に様々な学習活動が行われている。生涯学習の定義はされておらず、その内容は各学習者に委ねられる。総理府の1999年の調査によれば、成人が「してみたい生涯学習の内容」の上位には、1「趣味的なもの（音楽、美術、華道、舞踏、書道など）」、2「健康・スポーツ（健康法、医学、栄養、ジョギングなど）」

があがっている⁽³⁾。すなわち、自分を豊かにする学びといえる。

ユネスコはこれまで生涯学習の推進を牽引してきた。1997年に21世紀国際教育委員会から提出された報告書「学習・秘められた宝」では、国際化した現代社会に向けて「学習の四本柱」の中でも「共に生きることを学ぶ」重要性を強調している⁽⁴⁾。近年日本でもボランティア活動に関心が深まっている。しかしながら、上記のように私たちの一般的な学習の興味対象は、なかなか他者へは及びにくいことがわかる。他者に目を向け、世話をすることは、家庭内では親として子どもの世話していく役割があるが⁽⁵⁾、社会的な世話の役割は、学習とはみなされ難いのである。

私たちの生涯発達において、社会との関わりは欠かせない。ウィニコットにより「社会は、家族単位の統合に依拠しているが、これらの家族単位が、今度は個々の家族メンバーの成長の中でおこっている統合に依拠している」⁽⁶⁾とされるように、個人の人格的発達と社会は相互の関係にある。そこで、本稿では生涯学習の一課題と考えられる身近な社会での共生について考えていく。その具体的場面として、家庭教育における親と子の共生、母親と社会との共生について検討する。

方法として、始めに現代の子どもの様子から家庭教育を顧みる。次に、予備調査として、既に子育てを終えた世代に対して現代の母親と子ども、家庭教育についてインタビュー調査を行う。これらの考察から、現代の子育ての問題点をあげて質問紙を作成し、現在子育て中の母親、子育て後の高齢女性を対象とした子育てに関する質問紙調査を行った。とくに母親の子育てにおける学習要求とその支援に注目している。

これらから、家庭教育をめぐる世代間共生の課題を検討する。家庭内での子どもと大人の共生、より良い家庭教育のためには、親自身に家庭内や社会で健全なコミュニケーションがとれる資質が必要であり、このために学習が求められていることを示したい。

1. 家庭教育における大人と子どもの共生

近年、社会の各場面で共生が必要とされている。人を対象とした共生関係では、障害をもつ人との共生、外国人との共生、男女の共生などがあげられる。⁽⁷⁾ 個人の尊厳と平等な関係性を確認し合い、これを尊重していくために共生の視点は重要である。

「大人と子どもの共生」もこの一場面といえよう。子どもを一人格者として認める重要性は、「子どもの権利条約」にみられる。他方で、大人は発達途上にある未熟な子どもを保護する義務がある。子どもの有する権利は大人によって行使されるといえるのである。⁽⁸⁾ 共生の課題は、家庭内での親子の関係においても問い直される必要があると思われる。

京都市教育委員会が2001年に行った調査「生活・意識調査が示す小学校1年生のすがた」⁽⁹⁾は、子どもたちの家庭と親への思いを表している。「家に帰ったときほっとしますか」という質

問に対し、「ほっとする」と答えた子どもは59%、以下「あまりしない」20%、「ぜんぜんしない」21%であり、「その日の出来事を家の人に話しますか」では、「毎日話す」は34.6%、以下「時々話す」44.8%、「あまり話さない」10.8%、「ぜんぜん話さない」9.4%となっている。約4割の子どもが、家に帰ったときにほっとしないと回答しているこの調査からは、家庭は子どもたちにとって、その日一日に考えたり、感じたりしたことを表現し、受けとめてもらえる場では必ずしもないことがわかる。

小玉亮子は子どもを「自らを語らない者」としてとらえている⁽¹⁰⁾。「自らを語らない者」の本来の意味は、西洋の植民地支配にあった第三世界の人々、特に女性はサバルタン（服従者）として自らを語り得なかった事実を拠る。これに対して「語る者」とは常にエリートであり、支配者であった。このような強者と弱者の関係が家庭内にもあり、無力感をもつ子どもたちは口を閉ざすとされるのである。この子どもの沈黙は、親のあり方への無言のメッセージであるとも考えられる。

しかしながら、現代では同時に、子どもを育てる親にも困難さがみられることが顕著である。全国の児童相談所への児童虐待相談件数の推移は、図1のように近年急激に増えている⁽¹¹⁾。子どもを教育することへの迷いがうかがえる。

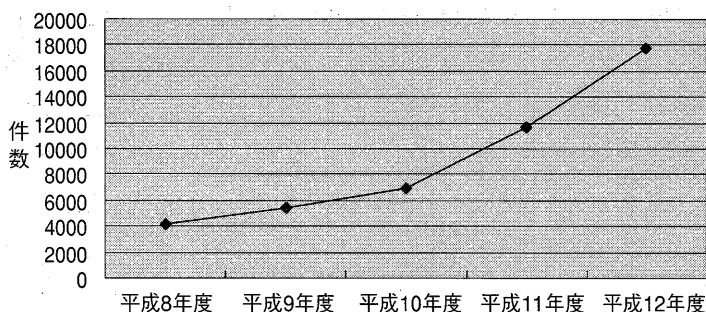


図1 児童相談所における児童虐待相談件数（全国）

2. 子育て後世代からみた現代の家庭教育

これらが現代の家庭教育の混迷を示しているとすれば、既に子育てを終えた世代の人々は、現在の家庭教育の状況をどうみているのだろうか。京都市在住の子育てを経験した男女7名に現代の子ども、母親、子育てについてインタビューを行った。実施時期は2003年8月から9月、時間は各60分程度である。この調査及び分析は、次に子育て中の母親に対して行う質問紙調査のための予備調査とし、とくに回答の下線部分に指摘された現代の家庭教育の傾向と問題点について検討している。

2-1. 現代の子どもと教育環境について

「現代の子どもと教育環境についてどう思いますか」という質問に対して、次のような回答が得られた。

- ・ 以前の子どもは、地域の友だちと小さい頃から自分達で作ってきたつながりのプロセスがあった①けれど、今はそれがないようだ。子どものやりたい事、子どもの本性は今も昔もあまり変わらないのではないか。子どもの時間が親によってしばられて、子どもの意思が通らない②ように思う。頑固な子どもがいないのか。(50代前半女性)
- ・ 挨拶をしない子どもが多い。同居の孫も起きてきて何も言わなかったが、するようになると、段々とするようになった。疲れているような時にはしないようだが、学校や友人関係では、気を遣って疲れているようだ。③(70代後半男性)
- ・ 孫たちは、テレビで何でも新しいことを知っていて、歳をとった私たちが知らないことも多い。だから、子どもたちは人から教わって初めて知るようなことが無くて④先生や親から教わるのが少ない。遊び方も教えることがない。何でも物は店で売っていて、お金さえ出せば買うことができる。⑤待ったり、辛抱したりすることもできない。(60代後半男性)
- ・ 若い親は、叱るべき時に叱らず、時折感情的に怒っているように思うことがあるが、むやみに親に叱られても子どもはすぐに謝っているようだ。聞き分けのいい子が、「良い子」とされているように思う。⑥(60代後半女性)
- ・ どの家もサラリーマンになってしまって、家で仕事をする職人がいなくなった。仕事の時間も長いし今の人は耐えられないのだろう。それでどの家の子も皆、同じように競争をし始めた。親は子どもに学業で競争に勝ってもらわないと不安で仕方がない⑦のだろう。手先が器用などの、子どもの得意なことが活かされることがない。⑧(70代前半男性)

現代の子どもと教育環境についてのインタビューから、次のようなことが考えられる。子どもの世界でも地域のつながりがなくなっている(下線①)。地域の遊び場が減り、遊びの種類がコンピュータゲームなど個人的な遊びになっていることも原因であろう。子どもたちへの評価は学業一律になりがちであり、その他の個性を伸ばしていく機会が乏しい(下線⑧)。子どもの将来像を案ずる親にとっては、成績が良いことが最も安心できる材料である(下線⑦)のかもしれない。すると、親の生活の多様化とは反対に、子どもたちの生活は一律化していくともいえるだろう。子どもたちの自由な時間は少なく、親によって時間管理されている(下線②)。

また、子どもたちの生育環境には消費とメディアが入り込むことにより、大人たちが子どもの生活態度について身近で教育する機会が少なくなっていることが指摘されている(下線④⑤)。親の要求や交友関係に対して気を遣い(下線③⑥)、伸び伸びとできない子ども像が現れている。

2-2. 現代の親、家庭教育について

「現代の若い親と家庭教育についてどう思いますか」という質問に対して、次のような回答が得られた。

- ・昔は嫌でも地域の人に子どもや親は色々なことを教わっていた。今の若い親は上の世代に対して距離を置いているように思う。挨拶はするが、それ以上はぴったりと扉を閉ざしている感じがする。地域の重要性が忘れ去られている。若い親同士も、よそよそしい。公園デビューなどはデビューして当然であって、何を言っているのか解らない。また、母親が気分的に不安定であるようだ。話をする場所がないのではないか。① (60代後半女性)
- ・子どもが小さい頃から、将来を方向づけしたがるように思う。② エスカレーターの入口で (子どもが小さい時に良い学校に入れることで) 親が安心しているようだが、これは本来の教育ママではないのではないか。 (50代前半女性)
- ・自分のことで精一杯。③ だから、傍にいて子どもは安心できない。同居している娘の子どもは、私の傍で寝るのが安心すると言って、隣に寝ている。 (70代後半男性)
- ・のんびりした母親が少ないように感じる。自分ができなかった事を子どもに期待して、自分自身の競争のために勉強させている感じもある。④ それでいつまでも子離れができない。問題を起こす子どもの親は、見栄を張って子どもを育てている親が多いのではないか。(中略) 子どもは塾通いなどで忙しい。子どもを家庭で親が教育する時間などないと思う。⑤ (70代前半男性)
- ・母親が知識をもって賢くなったように思うが、子育ての知恵とは別のものではないか。特に子どもが小さい頃は、賢母ではなくても、温かくて愛情深い母親であることの方が子どもにとっては大切だと思う。⑥ (50代後半女性)
- ・今朝、鳥が散らかしたゴミの掃除を雨の降中でしていた時、傍を通りかかった登校中の小学生の女の子が「ご苦労様です」と言って行った。いつも知らぬ顔で通りすぎる子どもが多いので驚き、疲れが吹き飛んだ気持ちだった。親はどんな装をしているのか聞いてみたいと思った。それくらい珍しい事だ。⑦ (70代後半男性)

現代の若い親についての質問に対しては、子どもの学業成績に熱心であり、挨拶などの生活面に対しては関心が少ない親が多いという意見が多くみられた (下線⑤⑦)。家庭教育において知識を優先するようになり (下線⑥)、子どもへの愛情と自分の自己実現が交錯している (下線④) ことが危惧されている。

現代の親は子育てに対して気持ちの余裕がなく、親自身が未熟であることが指摘されている (下線①③)。現代は家庭教育の目標がより短絡的になり、子どもが小さな頃から、目先の目標に向かって急かして育てる親の様子 (下線②) がうかがえる。

2-3. 自分の子育てを振り返って思うこと

「自分がしてきた子育てについて、信念や経験談がありましたらお話し下さい」及び「大人と子どもの関係についてどのように思いますか」という問いに対して、次のような回答が得られた。

・私の子育ては、今の子育てに比べると「気の長い子育て」だと思う。自分の子どもを信じて、「お祈り」しているようなもの。① 子どもの人柄を信じているから、子どもは（状態が）ひどく悪くなる前に戻ってくると思う。(50代前半女性)

・働きながら、子育てをしてきた。周りの皆で育ててもらったという思いがある。② 一人で育てたとは思わない。両親とは別居だったが、夏休みなどに祖父母のところへ預けたことで、子どもたちは別の生活と価値観を学べたことが良かった。③ (50代後半女性)

・人は何かを学ぶために、今そここの場所に出てきた登場人物であるように考えているので、今はたまたま自分の子どもだけれど、一人の人格という気がしている。神様から授かった子どもという、人間への畏れ多さのようなものが今はなくなっているように思う。④ 今の親子関係は、親が前に出たいお母さんが多いのでは。子どもを受け入れるというお母さんの役を楽しんでいない人が多いのでは。(50代前半女性)

・孫は自分の家にくると、まず仏壇に手を合わせに行く。私たち夫婦がしているまねを小さい頃からしている。そういうことは親では教えられないと思う。⑤ 妻は孫に厳しい事もあるので、孫はやってくると「おばあちゃんいる？」と聞く。私はいつも可愛がって甘やかしていると思うが、そういう所があっても良いと思う。⑥ (60代後半男性)

・若い親には子どもを触りまくる、こそばりまくる…ことを勧める。スキンシップは子どもとの隙間を埋めてくれる。⑦ 子どもに安心感があれば、子どもが少し大きくなって嫌なことがあったときにもそれを親に喋ってくる。その時は、子どもが充電して自分で調節しているのだから、黙って聞いてあげることが大切と思う。⑧ (50代前半女性)

・子どもが成長すると、私より教育を受けており、理論的に子どものほうが正しいこともあるが、その時には子どもの考えを認めてあげることが大切。母親は子どもをより（大きく）育てることが目的で、自分の意見を通すことが目的ではない。⑨ (60代後半女性)

この世代の人々の子育てには、はじめに子どもの存在を畏れ多いと思う気持ちがあり（下線①④）、それが地域の人の援助を受けたり（下線②③）、子どもの個性や意思を認める（下線⑧）といった、柔軟で開放的な家庭教育につながっている可能性がある。

祖父母の存在は、親とは違った子どもへの役割があると述べられている（下線⑤⑥）。子どもにとってそのような非日常的な空間は、彼らに一種の安らぎと人間的な厚みを与えるのではないだろうか。現代は地域の広場、秘密の隠れ家、祖父母の家など、家庭と学校以外の子どもの自由な居場所が少なくなっているように思われる。

また、子育ての潤滑油として笑顔、ユーモアとスキンシップが勧められている（下線⑦）。これらは、子どもと対等に対話し、子どもの心を開いていくためのきっかけでもあるだろう。そ

のために、親には気持ちのゆとりと冷静さが同時に要求される。親は子どもを所有するのではなく、親を超えようとする子どもを認めることが大切であるとされている（下線⑨）。

3. 子育て・家庭教育に関する質問紙調査

上述のインタビュー結果を参考として、家庭教育に関する質問紙を作成し、質問紙調査を行った。インタビューからは、現代の家庭教育では生活面よりも学業面が重視されていること、母親に気持ちのゆとりがなく人間関係において閉鎖的であること、また、子どもの個性が尊重されにくく、子育てと母親の自己実現が混同されていることなどが指摘された。本調査では、これらを仮説として、実際に家庭教育を行う親に何が問題となっており、どのような傾向の親にどんな支援・学習方法が求められているかを検討していく。

【調査の概要】

調査対象者は、京都市及び愛知県の都市部に在住する①年少の子どもが0歳から11歳の子どもをもつ現在子育て中の母親150名（回収率83.3%）、②既に子育てを終えた高齢女性40名（回収率61.5%）である。調査実施時期はいずれも2003年9月である。なお分析には、統計パッケージSPSSを使い、表計算ソフトExcelによって表・グラフ作成を行った。表1に調査対象者の属性を示す。

表1 調査対象者の属性

① 子育て中の母親（150名）

自分の年齢	人数	下の子どもの年齢	人数	子どもの人数	人数
20代前半	2	2歳未満	35	1人	38
20代後半	11	4歳未満	51	2人	47
30代前半	56	6歳未満	35	3人	30
30代後半	56	6歳以上	29	4人	3
40代前半	25				

② 子育て後の女性（40人）

自分の年齢	人数	孫の有無	人数
40代	4	なし	10
50代	10	有り	30
60代	15		
70代	11		

調査内容は（1）「子育て中の母親の意識と求められている学習・支援方法」と（2）「子育て中の母親への地域高齢女性による支援授受」である。以下に各調査の概要及び結果と考察を示す。

3-1. 調査（1）子育て中の母親の意識と求められている学習・支援方法

インタビューから指摘された現代の子育ての課題をもとに、子育て中の母親の子ども観、子育てへの肯定感・積極性、自己実現と子育ての葛藤、子育て・家庭教育に対する学習と支援の4つに関して設題を作成した（設問項目の詳細内容は表2を参照）。

これらの設題に対して、調査対象者①子育て中の母親に「そう思う・やや思う・どちらともいえない・どちらかというと思わない・思わない」の5段階評定から回答してもらった。そして、これらの相関関係、また学習要求との関係を検討した。

次に、母親の具体的な子育ての様子を知るために、「子育てでどんなことに悩むか」(質問項目は図6を参照。1つ選択)、「子育てに悩みや迷いがあったとき、どのように解決するか」(質問項目は図7を参照。2つまで選択)の質問をした。

【結果と考察】

表2は質問紙調査で尋ねた子育て中の母親の意識をまとめたものである。平均値は「そう思う・やや思う・どちらともいえない・どちらかというと思わない・思わない」のそれぞれを5・4・3・2・1点として算出したものを示している。※の項目について、後に詳しく検討する。

表2

I. 子ども観 (最近の子どもについて思うのは)	平均値
元気がある	2.91
挨拶ができる	2.64
しっかりしている (自分の考えをもち言える)	3.15
勉強熱心である※	3.39
II. 子育てへの肯定感・関わり方	
子育てを楽しんでいる	3.94
子どもの教育に熱心である	3.39
子どもを育てることで自分も成長していると思う※	4.48
子どもが話をするのを聞くのが好きだ※	4.42
子どものいない生活に戻りたいと思う※	1.71
子育て中は社会から孤立しがちである※	3.61
III. 自己実現と子育ての葛藤	
子どもに早く自立して欲しいと思う※	3.61
子どもの成功は自分の成功より大切である	3.89
子育てと仕事の両立をしたいと思う	4.33
現在自分の趣味や稽古事をしている	4.37
IV. 子育て・家庭教育に対する学習と支援	
子育てに信念がある※	3.57
子育てに関して情報や知識がもっと必要だと思う	3.57
子育てに関して話し合える場がもっと必要だと思う	3.83
子どもを一時的に預かってくれる場がほしいと思う	3.91
気軽に子育てについて学習できる所があればいい※	3.97
夫と共同で子育てをしていると思う※	3.79

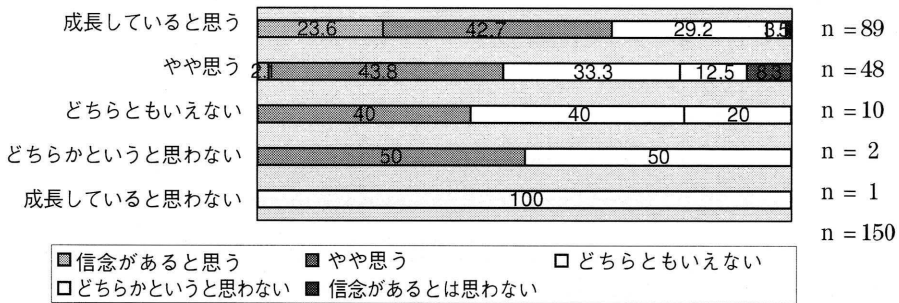
これらの回答の平均値をみると、子育てに肯定的な「子どもを育てることで自分も成長している」及び「子育てを楽しんでいる」と答えた母親の割合は多く、否定的な「子どものいない生活に戻りたい」と答えた母親の割合は比較的に少ないことがわかる。しかしながら、「子育て中は社会から孤立しがちである」と考える母親は、平均値3.61と高い値を示している。また、子育てに対する学習・支援の要求は全体的に高いことを示している。

母親の子育て意識に関する項目間の関連

次に、これら母親の子育て意識の関連性、また、母親の属性との関連をクロス集計によって調べ、5%水準の棄却率でカイ二乗検定を行った。ここでは有意な関連 ($P < 0.05$) がみられた項目のうち、表2の※印の項目間の関連について、下記に論ずる。

<子育てに肯定的な母親の傾向>

図2のように、子育てに肯定的であると思われる「子どもを育てることで自分も成長している」と強く感じている母親ほど、「子育てに信念がある」及び「子どもの話を聞くのが好き」と感じると回答していた。また、「子どもを育てることで自分も成長している」と強く感じている母親ほど、子ども観については「元気がある」、「しっかりしている」及び「勉強熱心である」という見方をしていた。これらの母親は、子育てに関する学習・支援要求に関してはとくに有意差がみられなかった。



$$\chi^2 = 34.849 \quad P < 0.01$$

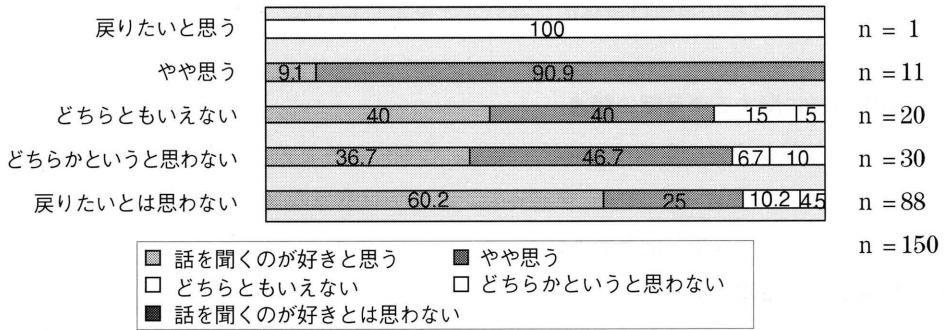
図2 「子どもを育てることで自分も成長している」と「子育てに信念がある」の関連性 (%)

すなわち、子育てに肯定的な母親は、子どもを理解することに積極的であり子育てにビジョンを持つことができる。親子の関係は親から子へと一方的に与えるばかりではなく、母親の生活に子どものいない時代とは違う価値観や楽しさを与えて、プラス面に働いていると考えられる。子どもとの日常的なやりとりを繰り返すなかで、子どもの良い所が発見される。そのため、子育ての悩みや迷いは解消され、学習や支援を受ける必要性をさほど感じないのではないか。

<子育てに否定的な母親の傾向>

次に、子育てに否定的であると思われる、「子どものいない生活に戻りたい」及び「子育て中

は社会から孤立しがちである」と答えた母親について検討する。「子どものいない生活に戻りたい」と強く感じている母親ほど、子ども観において「元気がある」、「しっかりしている」及び「勉強熱心である」とは感じていなかった。また、図3にみられるように、「子どもの話を聞くのが好き」及び「子育てに信念がある」という項目に対しては否定的にとらえている。

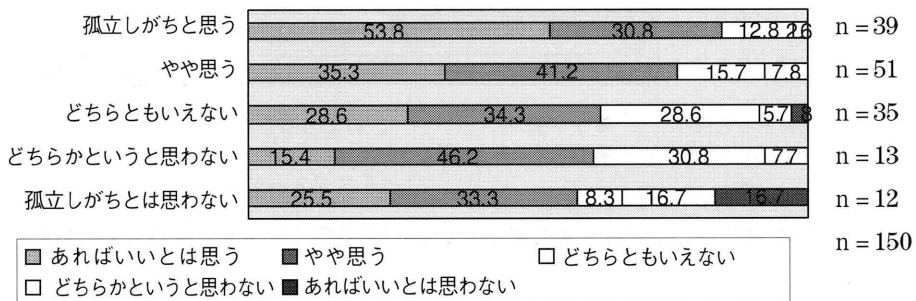


$$\chi^2 = 39.849 \quad P < 0.01$$

図3 「子どものいない生活に戻りたい」と「子どもの話を聞くのが好き」の関連性 (%)

調査結果から、子育てをする生活に否定的な感情をもつ「子どものいない生活に戻りたい」と感じている母親ほど、子どもとの会話など積極的な子どもとの関わりを好まず、母親役割を楽しむことができないことがうかがえる。一方、子どもがいるために社会とのつながりがもちにくいと考えている母親（「子育て中は社会から孤立しがちである」と感じている母親）は、子ども観や子どもと身近に関わる母親役割に対して否定的であるという関連はみられなかった。

この2つの子育て否定群の比較において対称的であるのは、学習要求についてである。



$$\chi^2 = 27.001 \quad P < 0.05$$

図4 「子育て中は社会から孤立しがち」と「気軽に子育てについて学習できる所があればいい」の関連性 (%)

「子どものいない生活に戻りたい」と思う母親役割自体に否定的な母親は子育てに関する学習要求との関連がみられなかったのに対し、子育て中の孤立感を感じている母親は、図4に示すように「子育てに関して情報や知識がもっと必要だと思う」を除く学習要求が強いという結果であった。これは、学習の場と共に社会との接点を求めているものと思われる。よって、そのた

めの方法として、情報や知識よりも実践的な支援の場や学習機会が必要とされているのである。個人の情報収集能力は高まっている現代であるが、自分の子育ての状況や悩みを理解してもらい、協同で解決していく機会が少なくなっていることを表しているのではないだろうか。

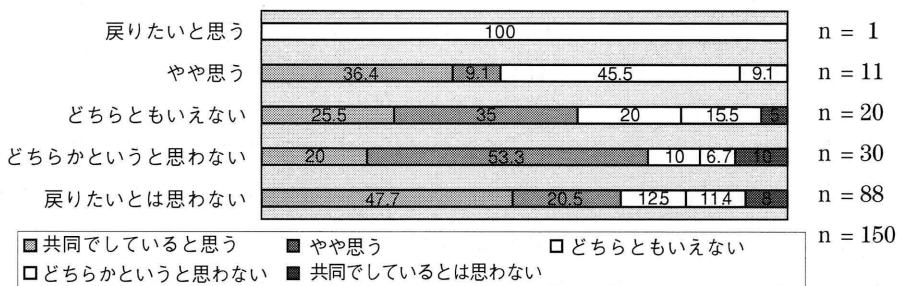
<母親の年齢・子どもの年齢・人数との関連>

年齢が高い子どもをもつ母親ほど「子どもに早く自立して欲しい」と感じていた。また、10%水準の棄却率ではあったが、同様に年齢が高い子どもをもつ母親ほど「子育てと仕事の両立がしたい」と感じている点が注目に値する。子どもが小さいほど母親の迷いやストレスが多いかと思われたが、子育てに関する肯定感や否定感、学習・支援要求には、母親と子どもの年齢による差は見られなかった。

子どもが小さく手がかかる時期は、母親としての役割期待も大きく、子どもとの接触が多いために子どもとの愛着形成が行われる時期でもある。時間的な制約から仕事を諦める母親が多い一方で、子育ての苦勞が充実感で相殺されるために、外での仕事を望まない母親が多いのではないだろうか。子どもが成長して手が離れる時期に母親も子どもの自立を望み、母親以外の仕事を希望する、M字型就労といわれる女性の仕事形態に準じる結果となった。

<子育ての学習・支援について>

子育て・家庭教育は本来母親だけでなく、父親によっても行われるものであるが、図5にみられるように「子どものいない生活に戻りたい」と強く思う母親ほど、「夫と共同で子育てしていると思う」とは感じていない。



$$\chi^2 = 30.990 \quad P < 0.05$$

図5 「子どものいない生活に戻りたい」と「夫と共同で子育てしている」の関連性 (%)

先に「子育て中は社会から孤立しがちである」と考える母親は実践的な学習・支援を求めているという結果が得られた。子育てに関して肯定感をもたない母親は社会環境、家庭内でも協力が得られにくく、一人で子どもと向かい合っている様子がうかがえる。

高齢者のインタビューの中では、子育て期ほど周囲の人々に助けられることが多く、多数の人の手で子どもは育てられたことが回想されていた。現在はそのような地縁が乏しい。子どもの数も少ないために、子どもを介して知り合いが増える機会も少なくなるといえる。母親が孤立しがちであると感じる時、その子どもも社会から孤立していると考えられよう。

また、子育てに関する「情報・知識」、「話し合いの場」、「一時預かり」及び「学習の場」の4種類の学習・支援要求のそれぞれの間に強い関連が見られた。1つの支援を強く望んでいる母親ほど、他の支援も必要と感じているのである。しかし、消極的な母親の学習要求は社会に反映されにくい。現在の子育て支援策では保育所の充実など働く母親を対象としたものが目立つが、子どもとの生活に閉塞しがちな母親へも目が向けられ、様々なかたちの学習・支援方法が提供されることが望まれる。

子育てにおける悩みとその解決法について

次に、実際の子育ての様子について尋ねた「子育ての悩み」及び「子育てに悩んだ時の解決法」の設問に対して、図6及び図7のような結果が得られた。

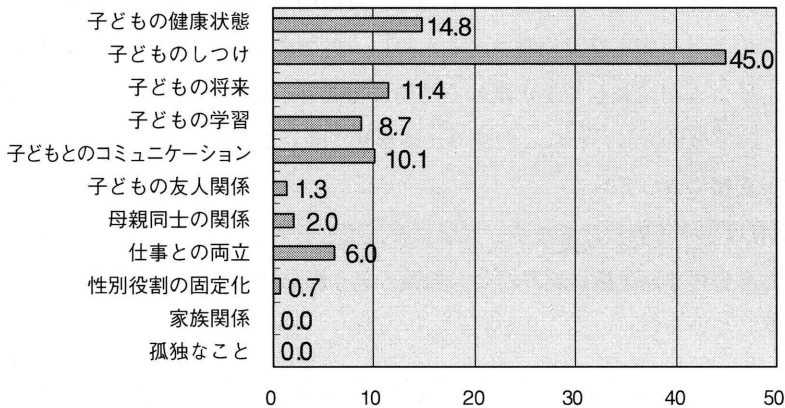


図6 子育てで悩むことは (%)

「子育ての悩み」についての設問では、「子どものしつけ」(45.0%)についての悩みが最も多く、「子どもの健康状態」(14.8%)「子どもの将来」(11.4%)と続いている。インタビューの指摘では、子どもの学業に対しては熱心だが日常的な子どものしつけを怠りがちな現代の母親像が浮かんだ。しかし、調査結果からはしつけへの関心は高いものの、どうしつけたらよいのか悩む母親が多いことがうかがえる。しつけの方法に確信がもてないために、外部からは「挨拶」などのしつけが行き届かないように感じられるのかもしれない。次に、これらの悩みをどのように解消しているかを尋ねた結果が図7である。

「子育てに悩んだ時の解決法」では「夫」に相談する人の割合が38.9%と最も多い。先の調査において、子育てに否定的な感情をもつ母親は夫の手助けがないと感じていた結果と同様、この結果からも母親の子育てパートナーとして夫への期待は大きいことがわかる。父親の子育てへの理解と協力が重要であり、育児の相談相手となるための時間的余裕がもてるような社会整備が必要である。続いて悩みの解決法として、「同年代の友人」に相談する母親の割合が26.5%と高い。以下、「自分の両親」(11.3%)「近所の育児経験者」(10.0%)と続いている。

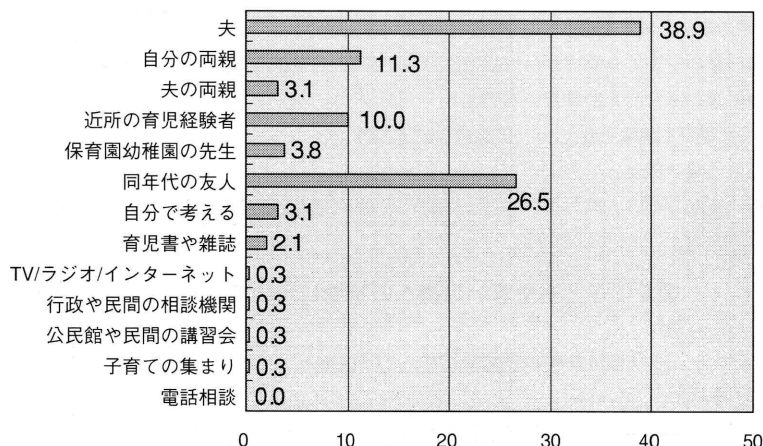


図7 子育てで悩んだときの解決法（相談先）（%）

現代はインターネットや育児雑誌によって問題解決をする母親が多いかと予測したが、少なかった。実際の子育ての問題解決は、子育て相談に特化した機関（育児書、インターネット、相談所、講習会など）によってよりも、日常生活のなかの人間関係において行われているといえる。情報の流通量が多くなり、個人のニーズに合った子育て情報が得られるようになっているが、今だに子育てや家庭教育に関する悩みは、人を介して解決することが求められているのである。

しかしながら、子育て中の母親の人間関係は、夫、友人といった狭い範囲に限られがちである。このため、異世代間の交流は乏しくなり、家族単位で社会から孤立することも考えられる。

3-2. 調査 (2) 子育て中母親への高齢女性による支援授受

次に、地域や世代のつながりが少なくなったことが子育てに影響を与えているという点について、社会的な子育て支援者と考えられる②子育て後高齢女性に対して、「子どもや若い母親への援助について」（質問項目は図8を参照。1つ選択）、「上のような子育てを助けることに、何が障害となっているか」（質問項目は図9を参照。1つ選択）を尋ねた。

さらに、①子育て中の母親を対象に、上記のような地域の高齢女性による子育て支援があった場合の受け入れ方について、「地域の高齢女性による相談ボランティアの集まりで、子育て・家庭教育についての相談会があったら参加したいか」、「地域の高齢女性が子どもを預かってくれるとしたら、頼みたいか」の質問を5段階評定で尋ねた。

【結果と考察】

子どもをもつ家族が暮らす地域において、子育て中の母親の支援者と考えられる、子育てを終えた高齢女性の意識は図8及び図9に示す結果となった。

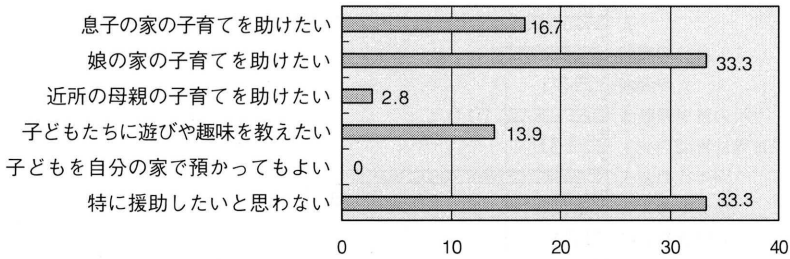


図8 子どもや若い母親への援助について (%)

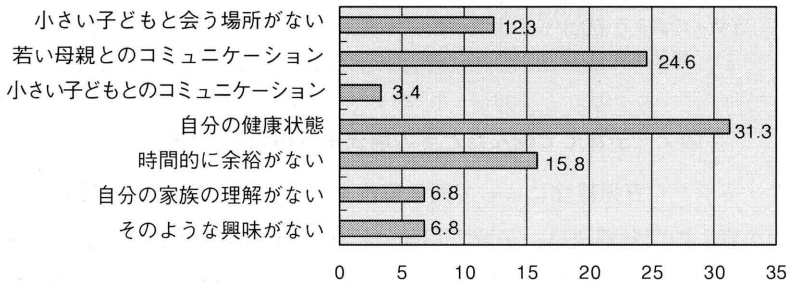


図9 子育ての援助に何が障害となっているか (%)

子育て後女性による子育て支援では、「娘の家の子育てを助けたい」と「特に援助したいと思わない」が共にもっとも多い（33.3%）。インタビューでは現代の子育てに対して様々な関心や意見が聞かれたが、実際には、若い世代や地域の子育て支援に対して積極的ではないことを示している。自分たちの子育て時代に、周囲の人からの援助を受けた経験のある高齢者の間にも、若い世代に対して同様の支援を行おうとする関心は低いといえる。支援に対して消極的な要因として、「自分の健康状態」（31.3%）、「若い母親とのコミュニケーション」（24.6%）があがっている。

次に、これらの支援を受ける側である子育て中の母親の参加意識は図10、図11のような結果となった。

子育て中の母親の中で、地域の高齢女性が行う「子育ての相談会に参加したい」人は「思う」、「やや思う」を合わせて36.0%であり、「子どもを預かってくれるなら頼みたい」人は「思う」、「やや思う」を合わせて47.3%であった。これより、現代の母親は地域社会との接触を回避する

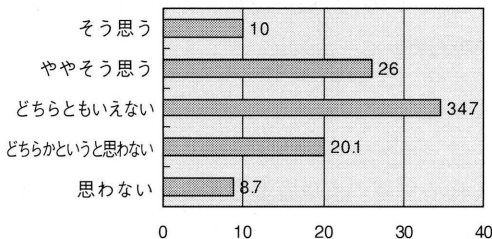


図10 子育ての相談会に参加したい (%)

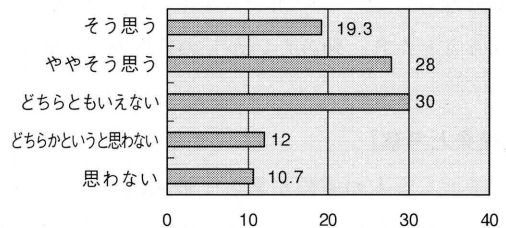


図11 子どもを預かってくれるなら頼みたい (%)

傾向にあるのではなく、窓口があればその支援を必要としているものと思われる。

ところで、調査(1)において、「子育て中は社会から孤立しがちである」と感じている母親ほど、「子育てに関する学習の場」や「子どもを一時的に預かってくれる場」を求めているという結果が得られたが、この母親群と、地域の子育て女性による支援である「子育ての相談会」及び「子どもの一時預かり」への希望との関連性を調べてみた。その結果、これらの母親は、実際の地域の子育て後女性による支援に対してはとくに関連を示さなかった。すなわち、潜在的な学習・支援要をもちつつも、現実的に地域社会の中で行われる支援に対しては必ずしも積極的でないことがわかったのである。

したがって、地域の支援があった場合に、これを受けようとする母親は本来の学習・支援ニーズの対象者ではなく、むしろ子どもとのかかわりにも積極的な子育て肯定群の母親の可能性がある。したがって、子育て中の生活に否定的な感情をもちがちな母親に対して、具体的にはどのような学習・支援方法が受け入れられやすいのかを検討することが必要である。

調査のまとめ

調査結果は以下の4点にまとめることができる。1点目には、子育て中の母親の意識傾向についてである。子どもとの会話や教育といった子どもとの関わりへの積極性は、肯定的な子育て観や子ども観と関連があった。学習要求に関しては「社会から孤立しがちである」と感じている母親は、子育てについての学習・支援要求が強かった。また、母親の役割に否定的な母親は夫の子育てへの協力が得られていないと感じていた。

2点目として実際の子育ての様子に関して、子育ての悩みは「子どものしつけ」がもっとも多い。その悩みは人に相談することによって解消されることが多く、相談相手は身近な夫や友人である割合が高い。3点目の子育て後女性による子育て支援に関しては、とくに一時預かりに子育て中母親からの支援要求が多いが、支援者側である高齢女性は健康上の理由や若い母親とのコミュニケーションなどを問題として、消極的である。4点目に、「社会から孤立しがちである」と感じている母親は、子育てに関する学習・支援要求が強いという傾向にあった。しかし、実際の地域の高齢者による子育て支援に対しては、消極的であるという結果が得られた。

おわりに

人は成長し、子どもから親になるなかで、育てられる存在から育てる存在へと立場を変えていく。しかしながら、変化が激しく、価値観が多様化した現代において子どもを育てる拠り所は確実ではない。子どもの世話をし、育てるという役割を担う親にも、学習の機会と支援の場が求められている。

「語らない子ども」は社会的弱者であると考えてきたが、母親の側にも社会との関わりに消

極的な「語らない」母親たちがあり、家庭内や社会での人間関係から孤立しがちな母親は子育てへの否定感や学習要求が強いことが調査から示された。社会進出に積極的な母親への支援ばかりではなく、子どもとの生活に閉塞感を感じがちな母親に対して、社会的な出会いを提供する学習機会と子育ての支援が必要である。

同時に、子育て経験者の声が反映されにくい現状がある。インタビューでは、高齢者から現代の家庭教育に対して様々な意見が聞かれたのに拘らず、質問紙調査においては、子どもや若い母親への関与に消極的・否定的な傾向があった。潜在的な支援力は活かされることがない。また、現代の母親は同世代である夫や友人に子育ての支援を求める傾向があり、世代間の隔たりがうかがえた。

「社会による子育て」を掲げ、子育てにおける学習・支援の機会を設ける際に、その基盤となるコミュニケーションのとり方が検討されなければならない。原ひろ子は、アメリカ人社会において、大変熱心に交流をもち合おうとするコミュニティのあり方を、アノミーの中では、話し合うことにより、折り合っていくしかないという人々の知恵であったとしている。⁽¹²⁾ 多様性の中で私たちはいかに自閉的にならず、社会と関わりながら発達していくことができるのか。成人の生涯学習活動として、他者をも視野に置いた学習が、私たち自身の生涯発達にとり必要であると思われる。

〔注〕

- (1) 井上達夫『現代の貧困』岩波書店2001 pp.233-236
- (2) 山崎高哉は「根本的な価値・規範に対する合意がなく、共通の理想が存在しないところで、果して教育目的が設定され得るだろうか」としている。この問題提起は家庭教育にも該当すると考えられる。山崎高哉『価値多元化社会における教育の目的』『教育学研究』第64巻 1997 p.2
- (3) 『生涯学習に関する世論調査』総理府 1999 pp.29-33
- (4) 報告書では「学習の四本柱」として、「知ることを学ぶ、為すことを学ぶ、共に生きることを学ぶ、人間として学ぶ」をあげている。『学習；秘められた宝—ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書』天城勲監訳 ぎょうせい 1997 pp.72-73
- (5) エリクソンはepigenesis scheme (漸成説) と呼ばれるライフサイクルの図式において、社会との関わりによる生涯に渡る自我の発達を示している。親となる成人期の課題は、新しいものを生み出す「生殖性 (世代性)」であり、これを達成して獲得される徳は「世話」という積極的関与の感覚であるとされる。E.H.エリクソン (村瀬孝雄訳)『ライフサイクル、その完結』みすず書房 2001
- (6) D.W. ウィニコット (牛島定信監訳)『子どもと家庭—その発達と病理』誠信書房 1984 p.61
- (7) 嶺井正也「共生共育論の系譜と課題」嶺井正也・小沢牧子編『共生・教育を求めて』明石書房 1996 pp.33-35
- (8) 牧柁名は「子どもの権利は大人=社会によって承認されてその権利性が制度化される」と述べてい

- る。牧証名『かがやけ子どもの権利』新日本出版社 1991 p.50
- (9) 京都市立永松記念教育センター「生活・意識調査が示す小学校1年生のすがた」『平成13年度研究紀要』2001 pp.45-80
- (10) 小玉亮子「語らない子どもについて語ること」『教育学研究』第63巻・第3号 1996 pp.75-81 サバルタンについては、G.C.スピヴァク（上村忠男訳）『サバルタンは語ることができるか』みすず書房 1998
- (11) 厚生労働省 雇用対策・児童家庭局総務課ホームページ
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/0106/h0621-4.html>「児童相談所における児童虐待相談などの状況報告」より作成
- (12) 原ひろ子他編『叢書＜産む・育てる・教える—匿名の教育史2＞家族—自立と転生』藤原書店 1991 p.42

(うちやま じゅんこ 佛教大学研究員)

(指導：田中 圭治郎 教授)

2004年10月15日受理

